

核兵器と国際政治を
考えるための5冊

【評者】
亜細亜大学准教授
向和歌奈

刻々と変化する国際情勢のなかで、核兵器の存在感が増している。ロシアによるウクライナ侵攻では、ロシアが核兵器の使用の可能性をちらつかせ、核戦争が現実のものになるのではないかと、国際社会に緊張が走った。東ア

ジアでは、核戦力を増強している中国が台湾周辺で大規模な軍事演習を行い、北朝鮮の金正恩国務委員長は最高人民会議において、核戦力の強化とその使用の可能性について言及している。現在の日本は、核問題をはじめとす

る多くの安全保障上の課題を抱えている。外交・防衛分野に精通する専門家に、著者らの実務経験に基づく知見がふんだんに盛り込まれた分析が展開されている。核廃絶の理想を掲げつつ、

- ① **核兵器について、本音で話そう**
太田昌克、兼原信克、高見澤将林、番匠幸一郎・著
新潮新書、2022年
- ② **核のボタン**
——新たな核開発競争とトルーマンから
トランプまでの大統領権力
ウィリアム・J・ベリー、トム・Z・コリーナ・著
朝日新聞出版、2020年
- ③ **「核の忘却」の終わり**
——核兵器復権の時代
秋山信将、高橋杉雄・編
勁草書房、2019年
- ④ **核兵器の拡散**——終わりなき論争
スコット・セーガン、ケネス・ウォルツ・著
勁草書房、2017年
- ⑤ **核兵器禁止条約は日本を守れるか**
佐野利男・著
信山社、2022年

核抑止の世界にも目を配り、実効性のある政策を提案しなければ誰も話を聞いてくれないとの指摘は、重要である。

核兵器が存在する以上、実際に使用される可能性は常にある。②では、冷戦期に米政権中枢で核政策に携り、後に国防長官を務めた著者らが、核政策をめぐる国内外の緊迫した駆け引きの内情や、その過程で核兵器が実際に発射される可能性があることを、迫力ある記述で訴えかけてくる。そこには核兵器が二度と使われないようにとの願いが込められている。

冷戦が終結したことで、国際社会では大國間で核戦争が勃発する可能性が大幅に低下し、安全保障における核兵器の役割が縮小したことで、核軍縮や核廃絶への期待が高まった。その一方で、近年では核兵器の役割がむしろ復権しているとの見方もある。核兵器の在り方について、各国の核政策、地域

安全保障の理論、そして新興技術のインパクトなどの切り口からまとめた編著が、③である。

ではそもそも、なぜ国家は核兵器を保有するのだろうか。現在、世界では九カ国が核兵器を保有しており、かつて核保有を検討・模索した国も一定数存在する。④は、勢力均衡の立場で核拡散がもたらす影響を肯定的に捉える主張と、組織論の観点から核拡散を否定的に捉える主張を対比させることで、核問題の本質を描き出した重要な一冊である。

核問題の終着点、すなわち核廃絶という目標の達成は、残念ながらもまだほど遠い。それでも、核兵器の存在によって生み出されるリスクを少しでも減すために、これまでさまざまな取り組みがなされてきた。そのうち、二〇一七年に成立した核兵器禁止条約（TPNW）は、核兵器をめぐる議論への大き

な刺激となった。とはいえ、条約への賛成派と反対派の溝は依然として深く、一向に埋まる気配がない。⑤は、TPNWの登場で浮かび上がった課題を中心に、外交官として核軍縮・不拡散分野に長く携わってきた著者が、これまでの核軍縮交渉から見えてきた課題などについてまとめたものであり、核軍縮の難しさを理解するうえでの手掛かりを提供する。

日本には、世界で唯一の戦争被爆国として、「核兵器のない世界」の実現に向けて議論を牽引し、また実政策を前に進めていく使命がある。しかしながら、核兵器をめぐる現実は依然として厳しい。核抑止がいまだに安全保障政策の中心的な概念として認識されている事実も、否定できない。多くの課題が残るなか、核兵器について国内外での建設的な議論の展開が今後ますます求められる。●